

「孤独の癒し」

イエスが山から下りて来られると、大勢の群衆がイエスに従った。すると見よ。ツアラアトに冒された人がみもとに来て、イエスに向かってひれ伏し、「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります」と言った。イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに彼のツアラアトはきよめられた。イエスは彼に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ行って自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じたささげ物をしなさい。」

マタイの福音書 8章 1～4節

“God is good all the time” 「主は、良いお方」です。私たちの信じる主は「良いお方」であることを、この「読むメッセージ・シリーズ」を通して明らかにしたいと願っています。

「主が良いお方なら、なぜ？」というセリフを聞くことがあります。しかし、主に出会えば、主が良いお方であることが分かります。なぜなら主は良いお方だからです。

このシリーズを通して、読者の方々が今も生きて語られる主に出会い、このお方が良いお方であることを知る事が出来ますようにと心から願っています。

このシリーズでは、福音書に記されているイエスのお姿に注目をしていきます。なぜならイエスは、「道であり、真理であり、いのち」だからです。そしてイエスが「わたしを見た者は、父を見たのです。」(ヨハネ 14: 6～9)と語られたように、私たちはイエスを通して「良いお方」である、天の父なる神に出会うからです。

まず今回は、ひとりのツアラアトに冒された人とイエスとの出会いです。マタイの福音書 8章 1節から 4節までを読んでみましょう。

心を静めてイメージしてみてください。聖書の文字の中に飛び込んでいきましょう。ツアラアトに侵された人の必死さが感じられますか？ この人の気持ちが伝わってきますか？ イエスの気持ちは、イエスの表情は、その場の雰囲気、空気の匂い…。

孤独という病

イエスは、山上における教えを終えられて山から下りて来られました。その教えに感銘した多くの群衆がイエスを取り囲みました。その時、突然一人のツアラアトに冒された人物が現れて、イエスの御前にひれ伏したのです。

ツアラアトという病の現代における病名は定かではありません。ですから、原語のまま「ツアラアト」(新改訳)と訳したり、「重い皮膚病」(新共同訳)とも訳されています。確かなのは、死に至ることがあり、伝染するということであり、皮膚病ですから目で見て分かるということです。

当時は、祭司がこの皮膚の症状がツアラトであるかどうかを判定する役割を担っていました（レビ記 13、14 章を参照）。特に 13 章 45、46 節には「患部のあるそのツアラトの者は、自分の衣服を裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。その患部が彼にある間中、彼は汚れている。彼は汚れているので、ひとりで住み、その住まいは宿営の外でなければならない。」と記されています。

もしツアラトであると判定されたら、その瞬間に隔離されます。人里離れた荒野に追いやられ「一人」で住むのです。一瞬で、家族も、友人も、恋人も、仕事も、何もかも失い、社会から切り離され、「一人」になるのです。

さらには、この病は、「汚れ」に属するものです。それは、神の会衆から除外されることを意味します。この病にある人は、社会からも、人からも、さらには神からも見捨てられた存在とみなされていたのです。

しかも、この病の人々が人里に出て来るならば、その時には「私は、汚れた者です！」と大声で叫んで歩かなければならないのです。それを聞いた人々は、風上は何メートル、風下は何メートル離れなければならないという規則までありました。それは、感染を防ぐという意味もあったのでしょうか。

しかし「私は、汚れた者です！」というセリフは、「私は、神に見捨てられた者です！」というのと同じ意味です。それを自らの口で叫ばなければならないのです。この病にある人の「孤独」の深さはいかばかりでしょうか。自分が叫ぶと人が一斉に自分から離れていくのです。しかも困った時の神頼みと言いますが、その神からも見捨てられたら、人は一体どうしたらいいのでしょうか。「私は汚れた者です」と叫ぶたびに、自分が自分の存在を否定するのです。その言葉は、刃物のように心を突き刺したことでしょう。

皆さん、もしあなたが、今日一日だけでもいい、人に会うたびに「私は汚れた者です！ 見捨てられた者です！」と叫び、その度に人が一斉に自分から離れていくとするなら、いったいその精神はどんな状態になるのでしょうか？

今の時代に、そんな規則はありません。私たちが街中に出て行っても、そのように叫んでいる人はいません。しかし、もし心の叫びが聞こえるとするなら、どうでしょうか？

表情は笑顔でも「私は一人ぼっちだ！」という心の叫びが聞こえてくるようです。「私は、見捨てられたくない！ 私を受け入れて欲しい！ 私を認めて欲しい！ 自分が消えてなくなりそうだ！ 助けて！ もうだめだ！」と、街中が叫び声で一杯です。

現代におけるツアラトは「孤独」という病です。ある哲学者が言いました。「孤独とは、人里離れた山奥にあるのではない、都会の雑踏の中にある。」

今日も多くの人が、孤独という病の中で、孤独であることを隠しながら、笑顔で明るく、しかし心の中では「私は、一人だ」と叫びながら必死に生きているように思えるのです。

孤独から生まれる信仰

さて、このツアラトの人は、おそらく山上におけるイエスの教えを聞いていたのでしょうか。イエスの声はガリラヤの風にのって、おそらく人目を避けていたであろうこの人の元にも届

いたのです。

山から下りてきたイエスを大勢の群衆が取り囲んでいます。そこに突然、ツァラトに冒された人が、イエスのみもとに来てひれ伏して言いました。「お心一つで、私をきよくすることがお出来になります。」すると「イエスは手を伸ばして彼に触り、『私の心だきよくなれ』と言われた。すると、すぐに彼のツァラトは清められた。」のです。

この人にとって人前に出ていくことは、どれだけの勇気が必要でしょうか。もしかしたら、石を投げられ、排除されるかもしれないのです。群衆の反応を考えると思わず足がすくみま

す。しかし、この人は群衆の心ではなく、イエスの心考えたのです。イエスならどうしてくれるか、イエスなら何が出来るのか。イエスの心に自分の心が向いたとき、そこから奇跡が始まります。

そして、この人が思ったイエスの心は、その通りでした。勘違いではありませんでした。それではなぜ、この人にイエスの心があったのかと考えるのですが、おそらく分かったのではなく、信じたのです。イエスはツァラトを清める権威を持っている、そして清めてくださる心をお持ちであると分かったのではなく、信じたのです。

この信仰は、孤独から生まれます。この人には、これ以上失うものは何もないのです。この人の目には、イエスしか映っていないのです。

「人間の危機は、神の好機」という言葉があります。孤独は、私たちを暗闇の世界へと誘う病です。しかし、実は自分は孤独であるという本当の姿を知る時に、暗闇の中だからこそ、灯されている希望の光に気づきます。もはや、イエスしか見えない、そこにしか希望はないという状況に置かれるなら、それは間違いなく危機的状況でしょう。しかし、そこはイエスに出会い、孤独が癒される神の好機となるのです。

さらに、この人がイエスの御前に出て行こうとする時に、群衆の反応という事以上に、一つの壁があったろうと思います。それは、この病を汚れたものとして規定しているのはモーセの律法だということです。つまり、神が自らを汚れた者として規定しているということです。

しかし、だからこそ信じたのです。この人は、自分を汚れていると規定するのが神ならば、その汚れを清めるのも神であると信じたのです。自分を清めるのは神にしか出来ない、いえ神なら出来ると信じたのです。

そして、イエスが神の御子なら、それが出来る方なのです。

孤独の癒し

イエスは「わたしの心だ」と言われました。イエスの心とは、どのような心なのでしょう？ それは、イエスの行動に現れています。イエスは「手を伸ばして、触れました。」この行動は、ここに限ってのものです。他の癒しの記事においては、必ずしも同じ行動をしていません。ならば、ここにイエスの心が現れていると思われ

ます。少し距離を取った所でこのシーンをイメージする時、イエスだけがその他大勢の群衆とは、

正反対の動きをしていることが分かります。群衆は、この人がツァラトだと分かった瞬間に、パッと離れて一瞬でそこに輪が出来たでしょう。しかし、イエスは、彼に触れることが出来る距離まで近づくのです。

手を伸ばしていた人は、一瞬で手を引っ込めたはずですが、イエスは逆に手を伸ばすのです。しかも驚きの光景がそこに映し出されたのです。

なんとイエスは、この人に触れたのです。触れたらいけないのです。触れたら汚れが移るのです。群衆は驚いたはずですが、当時の規則を真っ向から破り、ツァラトの人に近づき、手を伸ばし、触れたのです。すべてが正反対なのです。

これが、イエスの心なのです。たとえ私から全ての人が離れ、手を引いたとしても、イエスだけは違うのです。イエスは、私たちに「一人」にはしないのです。「孤独」という病を癒すのは、イエスだけです。イエスだけが、私たちに近づき、手を伸ばし、触れてくださるのです。

ただしイエスは、ただツァラトを清め、この人を助けただけではありません。この癒しを通して、ご自身がメシヤ=救い主であることを示しておられるのです。

イエスは、神の御子です。神の律法がツァラトを汚れとして規定しているのです。神の御子であるイエスが、モーセの律法を否定するはずはありません。だからこそレビ記の規定に則り「祭司に自分を見せること、モーセが命じた捧げものをするように」と言われたのです。

イエスが手で触れた瞬間、この人の抱えている病、汚れ、痛み、苦しみ、孤独のすべてをその身に引き受けたのです。それは、まさに十字架を指し示しているのです。

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」

(イザヤ書 53 章 3 節～5 節)

孤独とは、人を暗闇の世界へと誘う病です。現代に生きる多くの方が、この病に取りつかれています。しかし、その孤独からイエスへの信仰が生まれるのです。私たちの信じるイエスは、確かに十字架の上で私たちの孤独という病を負ってくださいました。この十字架のイエスが、私たちの孤独を癒すのです。